臼太鼓の伝統が続くように

五十鈴小学校　五年　後藤　陽菜

皆さんは、臼太鼓踊りを知っていますか。臼太鼓踊りは、古くは豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に戦勝祈願で踊らせたことまでさかのぼります。私たちの地域にこの踊りを継承するためにたずさわった一人が、私の祖父です。祖父たちは、昭和五十一年に、地域の青年たちと集まり、臼太鼓踊りを復活させました。そして昭和五十九年には、五十鈴小学校で、毎年運動会に子ども臼太鼓踊りをひろうすることになりました。地域の伝統を学び、次の世代に継承していくため、子どもたちにも踊りを伝えたいという願いが、初代の校長先生に受け入れられたからだそうです。子ども臼太鼓踊りはこうして誕生し、今日まで踊り続けられています。

以前、祖父に「何年間、臼太鼓を教えているの」と尋ねたところ、祖父はなんと「三十九年になる」と答えました。その間にたずさわってこられた方々の苦労はどれほどだったのか考えました。子どもが覚えやすいように踊りを見直し、踊りやすい速さになるように何度も仲間と鐘をたたき、音楽の録音をしたこと。子どもが背負う竹を丈夫にし、長持ちさせる工夫をしたことなど、いろいろなことがあったのだそうです。私は、地域の人たちの臼太鼓に対する責任と情熱を感じ、運動会で臼太鼓を踊ることは決して当たり前のことではないのだと思いました。

今年五年生の私は、運動会で臼太鼓踊りを踊りました。臼太鼓踊りの練習は、「臼太鼓結団式」から始まります。結団式で私たちは、祖父から臼太鼓踊りへの熱い思いを聞き、踊ることへの気持ちを高めました。臼太鼓踊りは地域の人たちにとって、歴史的で特別な踊りであるということ。先人たちからずっと大切にされてきた宝物であるということ。私は、そのお話を聞き、臼太鼓踊りを誇りに感じることができました。今年も祖父が学校へ来て私たち五年生を指導しました。指導は厳しいですが、それだけ伝統の踊りを大事にしているのだと感じ、祖父に教わることをうれしく、誇らしく思えました。

運動会練習の期間中、家では母が私に踊りのコツを教えてくれました。母も私の年齢の時に、臼太鼓を踊り、今でもそれを覚えていて私に伝えてくれます。また、母だけでなく、子ども時代に踊った友達のお父さんたちも、お祭りで臼太鼓踊りを奉納し続けています。地域の人々が力を合わせてこの伝統を守り続けている証なのだと思います。運動会の練習を通して、伝統の重みについて、だんだんと知ることができるようになりました。

十一月四日には、町の行事「いきいきまちフェスティバル」で、臼太鼓踊りをひろうする機会があり、私も文化財愛護少年団として参加しました。本番に向けて、放課後に五、六年生の参加者が集まり、祖父の指導のもと練習をしました。このステージでは、伝統的な衣装と色あざやかなのぼり旗を身に付けて踊ります。運動会の時以上に良い踊りをひろうしたいと一生懸命練習しました。当日は、とても緊張しましたが、踊りを終えるとお客さんからたくさんの拍手が聞こえてきました。自分の地域だけでなく門川町内やそれ以外の人たちに踊りを知ってもらえたことがとて

もうれしく、大きな達成感がありました。そして私も地域の一人として今、伝統を受け継いでいるのだと誇らしく思えた経験をすることができました。

今年、五十鈴小学校は、四十周年を迎えました。十一月の記念式典では、全校生の前で文化財愛護少年団の六年生による臼太鼓踊りがひろうされました。かねや太鼓の音が会場に響きわたり、六年生のりんとした踊りがかっこよかったです。式に参加した祖母は、「上手だったね。感動して涙が出た。」と言っていました。私は、地域の人たちが、四十年間という五十鈴小学校の歴史を祝い、たたえてくださっているのだと感じました。このように臼太鼓を学校行事や地域の行事で踊り続け、多くの方に知ってもらうことを通して、次の世代へいつまでも受け継がれるのだと思います。未来の子どもたちも、今の私たちと同じように感動を味わい、誇りを感じてほしいです。

地域の人々をつなぎ、歴史をつなぐ伝統文化財、臼太鼓踊り。五十鈴小学校が五十周年になっても、百周年になっても、いつまでもこの踊りが学校や地域に愛され続けていきますように…。